

(※本講演録は講演要旨を日本私大教連書記局でまとめたものです)

大学・学問と平和

益川 敏英 (京都産業大学益川塾塾頭)

インタビュアー：日本私大教連副委員長・下地真樹

(下地) では記念講演を始めさせていただきます。本日はノーベル物理学賞受賞者で京都産業大学益川塾塾頭をされている益川敏英先生にインタビュー形式で縦横無尽に語っていただきたいと思います。僕はこういうのは全然不慣れですが、めったにない機会だと思い蛮勇を奮って引き受けさせていただきます。拙いところがありましたらご指摘いただければと思います。今日はいろいろなテーマ、大学と戦争あるいは科学者と戦争のこと、それから組合運動についてお話しさせていただきたいと思います。最初に先生の生い立ちについて、特に戦争中の体験もおありということですので、まずそのあたりからお話しを伺いたいと思います。

益川氏：僕が戦争体験というのはおこがましいと思うんだけど、当時生きていた人間は大なり小なり戦争の影響を受けたわけね。私の先輩にあたる沢田昭二という方は僕なんかには比べたら筆舌に絶するような体験をしている。中学生くらいのときに広島に住んでおられて、出かけようとしたときにぴかっと光った。それで戻ってみたら母親は家の下敷きになっている。隣から火が燃え移っている。引っ張り出そうとして

もう動かない。お母さんが「火の来ないところに逃げろ」と言ったから逃げたと淡々と書いてある。僕はその文章読んでね、なんでこんなに乾いた淡々とした文章なんだと思った。そら反対ね。思い出したらもう書けない。淡々と乾いた文章でなければ書けないような体験をされている。今でもよくその人と会いますけども、他にももっといると思うんです。おとなしい虫も殺さないような人も、戦争に連れて行かれて銃眼で敵の兵の顔がはっきり見えて引き金を引いた。そんな経験のほうが僕はつらいと思うのね。当時の 1945 年以前に生まれた人間は大なり小なりそういう戦争体験を受けている。僕みたいに語れるような体験なんて大したことはない。すさまじい体験をした人は語れないと思う。

そういう中から戦後の復興が始まって、おかしいんだけど今よりも青空天井でのびのびしていたのね。軍隊はなくなったし、自由にもの



と言えるし。物はないけれども頭の上から重石になるようなものはない。我々が大学に入ったころは戦後から20年近くたっていただけで、そのときに「日本は戦争で負けて物はなくなったし領土も狭い。だから我々は外国をキャッチアップするには科学の力でいくより仕方がないんだ」と言って、そういう意欲で勉強したんですね。しかし最近の若者を見ているとそういう覇気がない。留学希望者は減っていますよね。外国行ってしんどい思いしなくたって、日本でそこそこの生活ができればいいというサラリーマン根性ね。我々のときは少々背伸びしていたんだけど、諸外国をキャッチアップするんだという思いでがむしゃらに勉強した。そういうところはなくなっていると思うんですね。

それともう一つおかしな話なんだけど、いま親の収入による階層化が進んでいる。4年制の大学に行けるか行けないか、いい大学に行けるか行けないかということが親の収入に左右され、階層社会ができ上がっている。これはもう今から十数年前のデータなんだけど、東大と京大で親の収入を比べたら、東大のほうが80万円くらい多かった。それが今はもっとひどくなっているでしょ。僕はそういう社会は変わってほしいと思う。自分の気持ちとしては「ぶっ壊せ」というのが何となくぴたりくるんだけど、そんな過激なこと言っちゃいけないですね。

(下地) 戦時中のお話から、戦後、大学生になった当時のこと、最近の若者のことといろいろお話しいただいたんですけども、一つずつ少し補足的な質問をさせていただきたいと思えます。一つ目は大した戦争体験をされてないというお話でしたが、先生は5歳のときに家に焼夷弾が落ちてきてそれが不発だったからたまたま死ななかったということをお書きになってい

ました。僕はこれを読んでかなりのショックを受けたんですけども、もしよければお話しいただけませんか。

益川氏：私はその当時名古屋に住んでいたんだけど、親父は軍隊に金属類を持っていかれたもんだから木工工場を営めなくなった。それで三菱の軍事工場に勤めた。そこで何をやってたか。飛行機の翼にぶら下げる増槽、増加燃料タンクというんだけど、飛び上がる時に一番エネルギーがいるもんだから、そのタンクにガソリンを積んで、飛び上がったそれを海に捨てて飛んでいく。その増槽を親父はベニヤ板で作っていた。アメリカはジュラルミンでプレスして作るから1秒に1個できる。親父は「これでは負けるわな」と言っていました。当初住んでいた親父の木工工場は機械を持っていかれたもんで、おばあちゃんの家のおすぐ近くに引っ越すことになった。それが運悪く陸軍の高射砲陣地のすぐ横なの。日本の高射砲はだいたい7千メートルくらいしか届かない。B29は1万メートル飛んでいる。当たるはずがないね。しかし打ち上げられるとあそこに高射砲陣地があるわというので明確に目標にされるわけ。

それで我が家の周囲はみんな焼け野原になったけど、幸いなことにうちに落ちたジュラルミンの棒は不発弾だった。屋根を突き破って、2階の床を突き破って、1階の土間に落ちてきて、僕の目の前でコロコロ転がった。5歳くらいの子供の記憶というのは静止写真なんです。ムービーじゃない。僕の場合は確かにそうなの。だから僕の記憶は、不発弾が転がっている写真が1枚と、そのあとに両親が家財道具をリアカーに積んで僕をその上に乗っけて必死の形相で逃げ惑っている写真が1枚。この2枚。

(下地) 恐ろしい体験ですね。僕は実家が沖縄なんですけども、よく沖縄で言われるのが軍事基地のそばというのは安全な場所ではないということです。高射砲陣地のそばだから民家でも爆弾が落ちてくる、ターゲットにされるわけですよね。ところで先生が大学に入る頃というのは、終戦が5歳ですから1950年代後半くらいですか？

益川氏：1958年。安保の1年前ですね。逆説的なんだけど、あのときくらいよく勉強できた時期はない。学生自治会が運動を提起するとそれにはきちんと応えて、朝9時頃から団地に行き署名集めをしてくる。そのとき傑作なんだけどドアをノックすると奥さんがちょこっと顔出すわけ、チェーンをつけといたまま。「署名をお願いします」と言うと「間に合ってます」と言う。だけど上手な子はそこで世間話するのね。10分くらいやっていると情が移って署名してくれる。僕は「間に合ってます」と言われると「ああそうですか」と帰っていくんだけど。そのあと夕方の3時ごろに集会があるのでそれまで時間があるわけね。それで木陰に入って本を読んだり友達とセミナーをやったりする。そして一通り終わって解散になるでしょ。そうすると興奮しているもんだから仲間と別れづらいわけね。それで喫茶店に入って閉店になるまで議論する。だからあれくらい勉強できた時期はない。

(下地) どんな議論をされていたんですか？

益川氏：あの頃は旧制高校の先輩がいたわけね。彼らは8人ぐらいの大部屋に文系理系構わず突っ込まれるわけね。そうするとだからマルクス、エンゲルスだけじゃなくてヘーゲルくらいはみんな語ってましたね。語れないよう

であれば馬鹿にされる。だから僕も必死で法哲学なんか読みましたけど、ヘーゲルぐらいわかりづらいことを書くやついないね。自分の書いたものをわからせてやるものかと思っているんじゃないかというくらい。

時代の流れもあるんだろうけども我々が大学に入ったころは青空天井なんですね。何も無い。だから諸外国をキャッチアップするには俺たちが頑張る以外ないんだという思いが結構あったんですね。しかし最近の若者を見ていると、ほどほどの生活ができています。だから外国行って苦勞して勉強しようなんていうやつは少なくなっているよね。

(下地) 僕の世代は大学に入ったのがちょうど90年ごろで、おっしゃるようなそこそこの生活で満足という雰囲気はすごくあったと思います。

先生のご本を読んでいると、先生が大学・大学院で学ばれていた時代は、1955年のラッセル・アインシュタイン宣言など原水爆の開発に関わって科学者たちのある種の贖罪意識みたいなものが強かった時代に感じます。そのあたりの時期のお話をお聞かせいただけますか。

益川氏：私の先生である坂田昌一先生なんかは、旧制高校のときにヘーゲルの自然弁証法を読んでみたっていう、かなり変わった人です。坂田先生の友達だった武谷三男という物理学者なんかは、特高につかまって牢屋にぶち込まれているわけね。坂田先生はもうちょっと要領がいいもんだからそこまではいかないけども。恐ろしいことに戦争中は教室ごと信州のほうに疎開していたらしいのね。そのときに夕食後や夜なんかはかなり議論したんだと思うんだけど、「この戦争は負ける」とかね。坂田先生はバナールの『科学の社会的機能』を読んでいた

せいもあるんだろうけど、戦争が終わったら今までと違う組織化した研究体制、教授が威張っているようなピラミッド型ではなくて民主的なやり方で議論するようなものを作ろうと考えた。それで疎開から帰ってきて1946年5月に第1回の教室会議を開いたとき、研究者であれば対等である、物理学教室の運営はそういう体制でやっていくんだということを高らかにうたわれた。

いい思想と立派な組織があれば凡人でもいい仕事ができるというスローガン、私なんかはこれにころっと騙されて、名古屋大学の物理学教室にはちゃんとした組織もあるし総務もちゃんとある。だから俺は凡人だけれどもいい仕事ができるはずだと思っていました。

(下地) 坂田昌一先生が、研究室ではみんな対等で議論をするような場を提供してくださったというお話ですが、当時のエピソードや坂田先生の教えなど、いくつか紹介していただけませんか。

益川氏：基本的には個人ではなく集団で研究をするんだということで、坂田先生だけじゃなくて名古屋大学の物理学教室はそういう形でまわっています。だから実にすごいことなんだけど、のちに名古屋大学の総長をやられる早川幸男先生、その当時は30代後半くらいだったけど、世界的に名の知られた仕事をしていました。教室の忘年会みたいなことでビアパーティーをやった。そこで早川先生と大学院生だった僕が相撲とったんです。早川先生はインターハイの剣道で優勝したことがあるような人なんです、益川だったらチビだからひねってやれるだろうと思ったんでしょうね。だけど僕は砂糖を担いでいて腕力もあるもんだから1勝1敗だった。それでお駄賃として肩車してもらった。

その写真が残っているんだけど、片一方は院生の下っ端、早川先生はそうそうたる仕事をしている教授なの。すごいよね。

(下地) いま、砂糖を担いでいたというお話がありました。戦後、お父さんが砂糖問屋をされていて、本を買うためにその仕事を手伝ったというエピソードですね。業績のある著名な先生と大学院生が対等に相撲するような自由な雰囲気の中で研究活動ができたことを紹介いただきました。過去の問題についても少々お話を伺いたいんですけども、世界的にはラッセル・アインシュタイン宣言があり、著名な物理学者の先生方がパグウォッシュ会議に参加するというような時代でした。核に関する物理学者と戦争責任、益川先生はこの言葉は嫌いだということも書かれていますけれど、科学者と核兵器の問題についてはいかがでしょうか。

益川氏：基本的に研究者は、戦争に対してどれだけ加担したかは別問題として、大なり小なり贖罪意識があるものですね。二度と科学が戦争のために役立つはならないと。戦争は反対しなきゃいかんもんだというようなことが、日本学術会議の第1回総会のときもそれはかなりはっきり述べられていた。最近、学術会議は死にましたね。昔は学術会議の会員は選挙で研究者が選んでいたのね。学術会議には研究連絡委員会というのがあって、そこに学術会議会員の十数倍のメンバーがいて、そこで学術会議は現場の研究者とつながっていた。

(下地) 日本学術会議の話にも入ってきていますが、日本学術会議は戦後、軍事研究の協力はしないという明確な決意表明を出した。それがもう死んだということですけど、昔は日本学術会議の会員は選挙で選んでいたんですね。ちょ

うど先ほどうちの委員長の話を聞いたんですけど、当時は大学院生も日本学術会議のメンバーを選ぶ投票権を持っていたそうですね。そういう民主的な団体だったと。

最近の学術会議の動向についても伺いたんですが、例えば現在、安全保障に関する問題を審議する委員会も立ち上がっていて、その中で軍事研究への協力について見直すというような会長の発言があったりします。いわば軍事研究にのめり込んでいくような動きがありますが、それについてどう見られていますか。

益川氏：何年か前に物理学会が学術会議の会員に僕を推薦するという話が合ったんだけど、僕は断ったの。なぜかと言ったら13期のときに東京の会員があまりにも横暴だったから。東京の連中は、こん中にもいらっしゃるかもわからないけど、会議を午後5時から始める。彼らは一仕事済ませて出てくるから快適だと思うけど、遠方人間はそんなことやられたらお昼からあと仕事できないわけね。そんなことがあって腹が立ったもので物理学会が推薦すると言ったときに断ったの。

それを内閣府がどう読み間違えたか「あいつは学術会議に対する反対派だ」と思われたらしく、内閣府の学術会議の在り方に関する専門調査会というのに放り込まれたのね。はじめは大人しくずっと意見を聞いていたんだけど、行政法かなんかの学者さんがイギリスではどうなっているとか、なんとかかんとかべらべらしゃべる。新聞記者をやっている女性の委員がちょっと発言をされたものだから、僕もついでに発言させてもらった。そのとき何を言ったかという、学術会議というのは210名の会員だけでやっているわけじゃない。その下に研連というのがあり、その研連はちゃんと選挙で選ばれているんだ...

(下地) 「研連」というのは先ほどお話のあった「研究連絡委員会」の略称ですか？

益川氏：そうです。それで学術会議の会員は一般の研究者と太いパイプでつながれているんだと言った。しかし結局、今の学術会議の形に変えられたのね。会員の選出が選挙じゃなくなった。会員が任期満了でもって辞めていくときに次の会員の推薦をしていくわけね。

(下地) 世襲じゃないけど世襲みたいですね。

益川氏：だから自家受粉している。

(下地) なるほど、自家受粉ですか。そういうような仕組みになってしまって、体制的な部分で学術会議は死んだということですね。その結果として最近の学術会議が実際やっていることについてはいかがでしょうか。

益川氏：そういう経緯があるものだから、僕はあんまり今の学術会議はフォローしていないんだけど、ただど明らかに今の政府の方針を学術会議がフォローするようなことになっていますね。

(下地) そうですね。軍事研究はしないというスタンスを見直そうというような動きが出てきているわけですが、学術会議の動きとは別の話題として、研究者が軍事研究に関与するということについて、どのようにお考えでしょうか。

益川氏：防衛省がいろんな研究に補助金を出している。僕は初め、募集しているもの採択しているものを見て、それ自体にはそんなに毒性がないなっていう感じがしていた。でも今はちょ

っと違って、私自身の意見としては、防衛省は戦争目的で予算取っているわけね。だからそこが募集している研究は軍事研究なの。最終的には戦争目的に使おうと思ってそういう研究をさせているわけでしょ。だからそういう具合に個々の研究の趣旨がこうだからというんじゃなくて、どういう目的でそのお金が出てきたのかということを見るべきと思う。

1965年のベトナム戦争当時、アメリカは「ジェーソン機関」というのを作って、効率的な戦闘を研究させた。30人くらいのノーベル賞級の学者も実はそこに入っていました。そこでなにをやらせたかと言ったら、兵士にジャングルで戦闘してどれだけ殺したかということ報告させる。そうすると兵士は見られているわけじゃないから水増しした報告をするわけ。すると明らかにベトコンがいなくなるほどの数になる。けどまだベトコンがいると。それを防ぐためにどうしたらいいかということ議論させて、最終的に出てきた答えが、左耳を切り取って針金に串刺しにして持ってこさせると。左耳は人間に1個しかないから殺した数が正確にわかる。なぜ右耳ではいけないのかはようわからんけど。しかしそんな研究は陸軍研究所でもできるわけ。何が目的かと言えば、ノーベル賞級の学者を連れてきてそういう議論をさせたら、その学者たちはベトナム戦争に反対と言えなくなるでしょ。

(下地) グロテスクな話ですね。兵士が殺した敵軍兵士の数を正確に報告させるためにどうしたらいいかというアイディアを出させる形で科学者を関与させることで、戦争に反対できないような心持ちにさせていくんですね。そのジェーソン機関というのは、当時は秘密機関だったんでしょうか？

益川氏：あんまり秘密ではなかったと思うんだけどね。例えばわれわれ大学院生のころに、物理学会でジェーソン機関に協力することに反対するという決議を上げようとした。そしたら東大の偉い先生が、学問を議論する学会という場でそういうことを議論すべきでないと言った。その先生と僕は仲がいいんだけど口が悪いの。「若僧黙れ！」とか言うわけ。だから僕は「ぼんこつ黙れ！」とやり返す。そのあとは仲良く話をしていましたけど。

(下地) たしかジェーソン機関に協力するなっていう反対決議は出されたっていう話でしたね。戦争協力はするなという...

益川氏：協力というよりは精神的な動員だと思うんだよね。

(下地) なるほど、「精神的な動員」ということ、いま初めて気づきました。関連してもう一つ伺いたいんですけど、研究が直接軍事に協力するというのとは別に、民生での研究が軍事に転用されていくことについて、先生は著書の中でたくさんおもしろい事例、おもしろいと言うのは変なんですけど、ああこんなこともあったのかという事例をたくさん紹介されていますよね。

益川氏：だからね、科学者にとって軍事科学はおもしろいの。僕も大好きなんだけど、なぜか言ったら困難なことを打ち破るにはどうしたらいいかという話だからね。例えば戦車の装甲は40センチくらいあるんだけど、それを打ち抜くにはどうしたらいいか。バズーカー砲みたいなものをぶつけるとその装甲が破れるわけじゃない。衝撃波が伝わって、それと反対のところで跳ね返ってくるときに反作用でその壁がは

がれてその破片で中の兵隊がまる焦げになって死んじゃうわけ。

ついでに言うと、劣化ウラン弾というのはなにが問題かと言うと、劣化ウラン弾がぶつかる
と高温のガスになって空中を漂うわけね。するとその中に劣化ウランと言えどウランが入っている。それがホットパーティクル、熱い粒子となって空中を漂うと冷めて小さい微粒子になる。そこん中には当然放射性物質も入っている。

(下地) 劣化ウラン弾というのは、貫通力を高めるために砲弾の先端に劣化ウランという物質を使っているやつですね。

益川氏：はい。そのホットパーティクルが肺の中に入ると、劣化ウラン自身はトータルとして放射線量はそう大きいもんじゃないけど、小さい粒子の放射性物質が肺に入っていると非常に極小的に放射線でダメージを与える。それで長い時間が経つとガンになる。

(下地) ウランはアルファ線しか出さない、だからそのへんにあっても被ばくはしないけど、体の中に入ると危ないとよく言われますね。その劣化ウラン弾というのも先ほどのお話にあったように、この分厚い装甲を打ち破るにはどうしたらいいかという難しい問題を解く試みとして開発された。その問題を解くことが科学者にとってはおもしろいんだということなんです
ね。

益川氏：おもしろい。

(下地) 研究者にとってある種の「業」といってよいでしょうか、そうしたことを先生は正直にいろいろ書かれていますよね。

益川氏：研究者は自分の部屋に入ってそういう問題を考えているときが一番楽しいの。だからそういう中では劣化ウランみたいなものを利用することも考えるのかもわからない。しかしね、ものすごく重要なことは研究者に市民感覚を呼び戻してあげること。だから僕はよく「今日は天気いいから散歩に行こうじゃないか」と言って集会に連れていく。だましてでもいいから。そうしたらそこでどういう議論がされているか、じかに見た研究者は市民に戻っていくわけね。

(下地) 軍事研究というのは科学者の目で見るとおもしろいということは否定できない、だからこそ違う感覚を科学者は獲得しにいかなくゃいけないということですね。ちょっと逸れますが、僕は先生の著書の中でステルス戦闘機の塗料の話が印象的でした。

益川氏：日本の塗料会社が開発したやつね。サンシャイン 60 というビルが池袋にあるんだけど、あれを作ったときにテレビ電波が反射してゴーストが出る。それをどうしたらいいかというときに、日本ペイントという会社がフェライトを細かく砕いて塗料の中に混ぜ込んだ。フェライトって磁石ね。皆さんが黒板にぺたんとつけるやつなんだけど、あれが非常にいい電波吸収材になった。その塗料を戦闘機の表面に塗ってレーダーに映らない戦闘機を作っちゃったわけね。

(下地) 民生で良かれと思って作ったものが軍事に使われてしまうことについてはいろんな実例があげられていますが、科学の成果が軍事に使われてしまうことは原理的に防げないわけですから、そういうことが起きるものだという前提で、科学者はそこまで責任を最初から自

覚しとくべきだというような話として理解したらいいんでしょうか。

益川氏：市民感覚を持った研究者にしなきゃいけない。

(下地) そういう話の広がりにもすごく感銘を受けたんですけども、最近の軍事研究にのめり込んでいきそうな雰囲気があると思うんですけども、その背景というか原因というのはどのあたりにあると思いますでしょうか？

益川氏：のめり込んでいく原因？ だって、おもしろいよ。

(下地) そうですね、おもしろい。

益川氏：なぜか言ったら、中国の古事にあるように戦争というのは盾と矛の問題があるよね。どんな矛でも通せないような盾を作る。それを突き破る矛を作る。そのいたちごっこね。それは研究対象としてはおもしろい。だから研究者を個人の研究室の中に閉じ込めておいたままほっといたら、研究者は何をやらかすかわからない。その研究者を市民感覚の目線でものを見られるような研究者にしなきゃいけない。だからだましてでもいいから集会に連れて来いと。今日は天気がいいからちょっと散歩しようじゃないかと。

(下地) ちょっと気になるんですけど、だまして連れて行かれた人というのは、どんな反応されるんですか。

益川氏：たぶん、研究者だったらそういうもの見方もあるんだなということを知ると思うの。

(下地) 集会でけっこう素直に話を聞いて。

益川氏：うん。自分の考え方にそういう側面がなかったなっていうことに気が付くと思う。

(下地) 今まででいたい何人くらいだまして連れていかれたんですか？

益川氏：大勢。

(下地) すごいですよね。そういうお話をさせていただいて、労働組合のことに話題を広げていきたいんですけども、益川先生が労働組合に関わり始めたのはいつごろからなんでしょうか？

益川氏：労働組合に関わったのは名古屋大学で職についたときから。あのときくらい苦しかったことはなかった。なぜか言ったらね、書記長に書記さんがつく。そうすると僕は人使いがあんまり上手じゃないもんだから、その書記さんが週3日来るんだけども来られたら仕事を作らなきゃいかん。今だったら「自分で探せ」みたいな言い方をしたと思うんだけど、当時はナイーブなもんだから仕事を作るわけね。これをやってください、あれをやってください、この資料を整理してくださいとかね。

(下地) 益川先生が書記長をされていて、部下の書記さんに仕事を指示するわけですね。団体交渉用の必要な資料とかを集めさせたり、まとめさせたりとかそういうことですね。

益川氏：あんな苦しかったことない。今だったらもうちょっと上手にやりますよ。

(下地) 名古屋大学で職についてすぐ書記長をされたんですか？

益川氏：そう、助手になった途端に書記長をやらされた。

(下地) 助手で書記長ですか。僕は先生の本を読んでいて、当時から非正規雇用の方の問題があったということに、ちょっと驚きました。何となく最近の問題かと思っていただけ。

益川氏：先生がわがままなのね。なにか言ったら、自分が取ってきた研究費でデータ整理をしてなんとかしてって非正規の人を使うわけね。それが切れたときに「はい、研究費が切れましたので」と非正規の人を勝手に切る。そういうことが頻繁に起こっていた。

(下地)：最近とはちょっと背景的な構図が違うようですが、益川さんの時代だと例えば研究費に付随して研究業務を補助するような方、研究を支えてくれている人たちがこんな扱いを受けるのはけしからんというような感じでかなり激しくやられたそうですね。

益川氏：そう。研究費取ってきて雇ったやつを切ろうとした教授のところに行って、「こんなことは絶対に許さない」とやった。助手だったけど、机をだ一んと叩いてやって。最近なんだけど、新年に名誉教授懇談会というのがあって、そこ行ったら「益川さんにはだいぶいじめられたな」と言う人がいて。溝畑茂先生という数学の先生もいらっしやっただけど、その先生は「いや、そんなことないですよ」と言う。いじめられなかったってということね。当たり前よ。溝畑先生は偉い先生だから尊敬していた。いじめた先生はあんまり尊敬してなかった。

(下地) はっきりとおっしゃいますね。雇い止めにして平気であるような先生は尊敬しないということですね。もう一つ、最近の労働組合運

動の中で例えば平和と民主主義に関わる問題について、労働組合は労働条件についてたまたか組織なんだからそんなことやる必要がないという意見もちらほら聞かれるようになりました。そのあたりについて益川さんのご意見をお願いします。

益川氏：いや、組合が労働条件だけやっていればいいというのはちょっと狭いんじゃないかと思うんだけど。労働者にとって戦争というものがどういうものなのか。戦争が始まってみたら労働者をいちばん最初に連れて行く。だからそういう自分のたちの身の回りに起こっていることに対して、組合なら組合で意見を言うってことは当然のことで、僕はそんな労働条件だけのことをやっていたら、労働条件のことも獲得できないと思う。

(下地) たいへん励まされるお話です。先生が最近の世の中の状況や平和・民主主義の問題で、これは気になるぞというようなことはありますか？

益川氏：いちばん気になっているのは安倍政治。これは立憲主義の政府がやることではないはずなの。立憲政治というのは憲法をちゃんと確立してそれに従って物事をやるわけでしょ。安倍さんがやろうとしているのは、憲法なんかどうでもいいってことなわけね。戦争法なんかみてみてよ。憲法が戦争を禁止していても、アメリカが攻撃されたらやっつけていいんだと言っているわけでしょ。そんなのは無茶なの。僕は、憲法は原理的に変えちゃいかんもんだと思うの。なぜかと言ったら憲法でも 96 条のところに現在の憲法を変える方法がちゃんと書いてあるのね。国会で 3 分の 2 以上の決議を得て、そして国民投票で 2 分の 1 以上の賛

成を得たら変えられると書いてある。だから当然のことながら、今の憲法でも変える手続きまで書いてあるということは、絶対に守れというんじゃない。なんて言うんだらう、完全なものとして存在しているとは書いてないわけね。しかし立憲政治をしているわけだから、少なくとも安倍さんは憲法を変えるなら憲法 96 条に書いてあるような手続きを経て変えるべきなの。

(下地) 憲法の中に変える手続きちゃんが書いてあるんだから、やるなら正々堂々とやれという話ですよ。また関連すると思うんですけども、例えばこの前の選挙のときもそうでしたけども、憲法改正の話をやめちゃうんですよ。争点隠しと言われますがそういう議論の進め方なんかについてはどう思われますか？

益川氏：だから、安倍政治というものがロジカルじゃないのね。

(下地) ロジカル？

益川氏：右翼でもなんでも、それはその人の意見だから、それが正しいかどうかということを民主的に決めたらいいと思うけど、安倍さんはだまして変えようとしているわけ。だましてというより、こっそりやろうとするんだよね。そして結果を押し付ける。

(下地) まったくおっしゃる通りだと思います。それでは最後に、本日は私立大学の教研集会ですので、私立大学に関して益川さんにお話しを聞きたいと思います。益川さんは名古屋大学から始まって国立大学で長く仕事をされて、最近では京産大など私立大学にも関わるようになったわけですが、両者の違いとかお感じにな

ったことがありましたらお話いただければと思います。

益川氏：当然のことなんだけど、いまの私立大学というのは学生さんが納める学費で成り立っているわけね。多少は私学助成みたいなものがあるけれども。それと国立の一部は研究大学なのね。だから置かれている状況が全然違う。僕は京都産業大学に行って、その差が歴然としていてびっくりした。それで始めた運動が、日大と京産大で1年交代でセミナーをやろうということ。ゆくゆくは、僕は100年経ったらと言っているんだけど、私学連合みたいな作りたいなど。自分たちが持っている資産を寄せ合って力強い研究ができるような場を作ろうじゃないかと言って始めたんだけど、もう7年くらい経つかな、少しずつ動いています。

(下地) 益川さんのお話には100年とか200年かけてといったことがよく出てきますよね。

益川氏：僕の影の声があってね、「益川、そんなこと言うけど100年先にいないからな」と言われるけどね。

(下地) なんていうか世の中のこともそうですし大学のこともそうですけど、僕は今年とか来年ぐらいのことを考えているとやっぱり絶望したくなる場所もいろいろありますけど、ふと200年くらい経ったら戦争はなくなると確信しているみたいな感じ方なんですよ。

益川氏：それだけは僕は確信を持って言えるんだけど、今の世界を見ているとこんな状況で大丈夫かと思うわけ。だけど100年単位の歴史を見てみたら明らかに進歩している。例えば1945年までは大きな戦争があった。しかし今

の段階では世界大戦と言われるような状況はない。せいぜい狭い地域で宗教がらみの戦争があるくらいとかね。植民地も1970年くらいに一応なくなった。形のうえではね。

(下地) 1945年あたり第二次世界大戦が終わったあたりを境目にしても、例えばそれ以前は国際人権規約とか、人権を定めたような僕らの「よすが」になるものがほとんど何もなかった時代ですよ。そういうところからすると確かに、少なくともおかしいだろと言えるような根拠がいろんなところでできているのは進歩かなって感じがします。楽になるという感じはしないんですけど、絶望しそうなときでも、それならそれで100年後に役に立つような仕事とか行動、活動、何が今できるかと考えると無力感とはちょっと違う感じになるなって思いながらお聞きしました。ちょっと元気が出ます。

それではインタビューはここまでとさせていただいて、質疑に移りたいと思います。いろいろお話しいただいてどうもありがとうございます。それではフロアからお願いします。

[質問者1] 益川塾塾頭をされているとのことですが、その益川塾のこととか塾頭のお仕事のこととかそのへんのこともお聞かせください。

益川氏：益川塾という名前は僕あんまり好きじゃない。友達から「益川塾って英語で表記するときどう言うんだ」って聞かれる。これは僕がノーベル賞もらったときに坂井さんって学長がいたんだけど、彼が反射的に産大の中でそれなりの人を集めて塾を作るという発想をしたの。「それはやめてくれ」と。1年経って「益川塾の成果は何でしたかと聞かれたらどうするんですか」と。毎年毎年そんなに自慢できるような成果が出てくるとは思えない。それで形を

変えて、今では退官した先生方、研究の拠点を持っていない先生方に発表とか研究の場、研究交流の場を提供するという、もう一つは若手研究者の養成。ほんのわずかなお金をあげたり、旅費をあげたりして活動してもらおう。そういうことをやっている。その中でもう一つは、ゆくゆくは私大連合みたいにしたいんだけど、一気にそんなことができるわけがないから日大とうちとで。関東と関西だからあんまり競合しないだろうと。だいたい私学は基本的に言ったら競争相手なのね。だからあんまり無茶なことをやったってうまくいくはずがないというので、日大の仲さんという僕のよく知っている人がいるもんだから、その人と相談して1年ごとに交代でシンポジウムをやるという構想でやっています。ほんのわずかだけでも、「俺たちもちょっと入れてくれ」と言う仲間が増えていきます。

[質問者2] さきほど、100年後200年後には戦争がなくなっていると確信しているというお話がありました。そのときのイメージはどのようなものを持っていますか？

益川氏：基本的には大国の力が落ちていくということが一つ。もう一つは産油国、そこに宗教が絡んでるわけね。世界には160個くらい国があるんだけど、いろんな立場の人たちがいるのでそういう人たちが意見を言ってくれるような機構が増えてくるんだと思うんです。そうしたらそんな馬鹿なことをやめなよっていう国連がもう少し機能しだす。国連がと言っちゃいけないな。観客席が第三者として発言してくれるようになるだろうと僕は思っている。

[質問者3] 研究室に閉じこもらないで市民感覚を持たせるような動きというお話しは大変参

考になりました。ちょっと具体的な話なんですけど、日本学術会議で軍学共同に関する委員会が始まって先日傍聴したんですけど、デュアルユースの話になったときにいろんな意見が出ていました。私がいちばん気になったのは向井千秋さんが「ユースのところだけをチェックすればいい、研究の自由、学問の自由があるのでユースのところだけをチェックする新機関を作ればいい」というような発言をされたんですね。私はそれは違うだろうと思ったんですが、考えてみて研究の自由、学問の自由とユースでのチェックとの理論的な整合性がなかなか出てこなかったんですけども、研究の自由についてちょっと調べたら、やっぱりそこには戦争、軍事の研究については疑問点がつけられているというような解説があったので、そこを突破するのはそれだなと思ったんですが、そういう考え方の整理でよろしいのでしょうか？

益川氏：基本的には僕は公開ということだと思うんだけど。

(下地) 研究成果の公開ですか？

益川氏：成果と言うよりも何をやっているのかね。デュアルユースがどうのこうの言ったときに問題になるのは、開発した人がデュアルユースをやるわけじゃない。第三者なの。知らないところでその成果を使うわけね。そんなものを開発者がチェックするわけにはいかない。だから基本的には一般市民がいったい研究者は何をやっているんだという、監視というか、やっていることを公開しみんなが覗き込めるような体制を作るべきだと僕は思っていますけど。

(下地) 質問もちょっと込み入っていたので少し整理をお願いしたいのですが、向井千秋さん

の話というのはデュアルユースというときに、研究成果を軍事に使用するようなところに歯止めをかける、そういうチェックするような機関を作ればいいというような話なんですよ？

[質問者3] まったく無縁な方向になってくると思うんですね。だから監視もできないんじゃないかと。ユースのときの監視もその起源は誰のどういう研究なんだということもチェックできないと思うんです。

(下地) やっぱり研究成果から始まってあらゆる部分で公開が大事だということですね。ユースのところをチェックすればいいというのは、今まで割と野放しにしてきたところをこれからもっとチェックすべきじゃないかという話としてなら、大事なという気が僕はしたんですけども。

益川氏：研究というのは非常に複雑な過程ですから、どこからお金が出ているか何をやっているかなんてことは逐一フォローできない。僕はどういう経験したかと言うと、物理教室で宇宙物理を研究している人がロケットあげたときに問題になるのは宇宙に漂っているデブリの問題。デブリがだいたい秒速3キロメートルくらいでぶつかってくるのね。私がいたところの宇宙船を研究している人が、自分たちが打ち上げる観測機械がどれくらいダメージを受けるか調査しようと思った。そのときに自分で秒速3キロくらいの岩石を打ち出すガンを作ろうと思ったんだけどちょっと待てよと。大学だからこんなものを持っている人がいるかわからんと思って、貸してくれる人がいないかというのを調べた。そしたら工学部にそれを研究している人がいたの。金属の破片を秒速3キロくらいの速さで打ち出す機械を持っていた。そのときに

僕が思ったのは何か言ったら、秒速3キロというのには戦車を打ち抜く砲弾の速度なの。だから砲弾によってどれくらいダメージ受けるかということの研究している人がいるということね。それはその人が軍事研究としてやろうと思ったんじゃないで、間接的にいろんなところから回ってきて、どれくらいのダメージを受けるかということが話題になってその人が取り上げただけかも知れない。だから研究というのは非常に多方面なものを持っている。

(下地) 要するに戦車がダメージを受けるかどうかという話と、宇宙船がデブリでダメージを受けるかどうかという話は、物理的には同じ現象だから研究としては分けられないということですよ。だから結局のところは戦争してしまう社会のほうをどうにかしないと、科学が悪用されるのは止められないという話になってくるんじゃないでしょうか。

益川氏：だから僕は最近、軍事研究かどうかということとはね、お金を出した人がどういう目的でその研究をやっているかということだと。

(下地) つまり、明示的に軍事に使うというような動機があるところはまずアウト、さらにその先のユース、使うところでどんな使い方をしているかということまでは研究者は見られないけど、何かしらのチェック、市民が見ていく必要があるという話ですよ。そうしたら今の関連でもいいですけど、質問をよろしく願います。

[質問者4] 先日の報道で防衛相が電磁レールガンの開発予算を計上したということについて、軍事目的の研究だと思うんですけども、政策的あるいは技術的に先生がどういうふうに

感じていらっしゃるかというのをコメントいただけませんか。

益川氏：僕にそういうことを聞くととんでもない答えが返ってきますよ。戦争技術というのはおもしろい。どういう技術でも打ち破れないものがあつたとすれば、打ち破るものを研究することはある意味で知的好奇心をくすぐる。それを使っちゃいけないけどね。

(下地) おもしろいからやっついでいい、ということでもないですよ。

益川氏：そういうことじゃない。

(下地) 軍事目的に使っちゃいけないということはわかりやすいけど、研究レベルのところではどうなんですか。そこはやっぱり市民感覚で止めるべきだという...

益川氏：だから研究者に任せといたらね、へんてこなやつが出てくる。

(下地) だから直接もろに軍事目的なんだという研究だったら、研究者はおもしろいけどもやっぱり手出しちゃだめだと。

益川氏：基本的には、どこからお金が出ているかということね。防衛省から出ればそれは軍事研究。どんな研究をやらせても。

[質問者5] 軍事研究とかデュアルユースのところに関係するんですが、私の大学は工学系の大学で学生が三菱重工に一部就職します。そうするとそこでやっている研究は明らかに兵器開発等々につながるものです。そういった学生に「いつも市民感覚を持って」という意味、先生がおっしゃることはわかるんですけど、市民感覚

を持ってしまうと学生が悩んで、そういうところに就職すると辞めなきゃいけないということも出てくるんですね。その場合にどうしたらいいんだろうというのがいつも私自身の悩みです。確かに理工系の学生たちはおもしろいと言うんですけど、そうすると「そういうところには就職するな」と言うべきなのか、就職したときに「それは仕事として割り切って頑張るとりあえずやっておけ」というふうに言うべきなのか。そういう問題について先生自身が悩んだことなども含めて、経験的に何かお考えになっていることはありますか。

益川氏：いや、その質問だと「そういう経験はありません」で済むんだけど、ものすごく悩ましい問題ですね。われわれの社会の中にそういう軍事研究をやっている人間がいるんだから、そこで公募したら、それに対して応募する人間もいるはずね。それをどうするかということは科学者の問題じゃなくて社会の問題ね。

(下地) ヒントになるかわかりませんが、益川さんは本の中で朝永振一郎先生の戦時中の話を紹介されていましたね。朝永先生が戦時中に戦争協力させられて書かれた論文を、戦後に益川さんが読んでいて、どうも結論部分で手を抜いている、核心部分を渡さないような書き方をしているということが専門家だからわかる、そういう抵抗の仕方をされていたのかなというように紹介されていました。ちょっとご説明いただけませんか。

益川氏：基本的には、そういう社会の中でそういうことが起こっているのかな。必ずそういうものに巻き込まれてしまうことってあるよね。中国革命のさなか、共産主義政権ができたときに、中国でいくつかの英雄物語みたいな小説が

出たのね。そのうちの『紅岩』というのを読んだんだけど、共産黨員なんだけども警察署長をやっている男の話なの。まだ革命が起こる前には体制に協力せざるを得ないので手を抜きながらやっていて、最後にはどうするかというと、牢屋に入れられている人間をみんな開放してその男は自殺する。僕はそれは人間としての生き様の問題だと思うんだよね。できるだけ手を染めずに生きられたら、そんなハッピーなことはないんだけど、社会がそういう枠組みになっている以上それに関わらざるを得ない立場の人もいるだろう。そのときにどういう具合に生きるか。これ表面化したら自分は牢屋に放り込まれるぞ、それは嫌だなんて。それならどうやって手を抜くかと。その本を僕は感動して読んだんだけど、一人ひとりの生き様の問題だと思うんだよね。

(下地) これはすごく難しい、ヘビーですけど、すごくいい質問がいただけたかなと思えました。ほかの方、いかがでしょうか。

[質問者6] 学術会議の安全保障委員会の傍聴をしたんですけど、そのときも議論になっていたんですけど、やっぱり大学というもののあり様からすると、研究というのは公開性が非常に大事ですよ。ただ、科学者は軍事研究にどう関わるのかとなってくると、科学者というのは民間の研究所にもいますから、学術会議でもこれは大学の場でという話にするのか、科学者たるものというふうに話をするのかということも議論されていました。どんなふうに考えたらいいのか教えていただければと思います。

益川氏：だからものすごく難しい問題で、一人ひとりがどういう場に生きるかという問題。もう一つはいろいろなしがらみがある社会の中

で、自分がどういう歴史を持って今まで生きてきて、どういうポジションにいるのかということから絡んでくるわけね。初期条件を選べない。たまたま親父がやっていた商売がうまくいなくて三菱なんかかというところの工場から下請けの仕事もらっちゃったとかね。社会の中にもうすでにそういう軍事部門というのがあるんだから、それは原理的にこうだという答えを僕は出せない。だからそういう社会の中で自分がどうやって生きるのか。またもう少し別の言い方をしたら、こういう生き方もあるよというようなね。僕はそういう一人ひとりの問題じゃないのかなって思います。

(下地) それと似た構図の問題ですが、僕は沖縄生まれなんですけども、米軍基地の中で働く仕事があって県内でも比較的給料がいい仕事なんですよね。基地で働きながら、でも基地があることへの抵抗感とかいろいろ矛盾しながら悩んだりということは昔からあるんですけども、そういうことと似ていますよね。現実が矛盾している中でどういうふう生きてくか、難しい話だとは思いますが。

益川氏：そういう中で、何ができるかという種類の問題もありますね。何ができるか。基地の中で働いていても、あれは戦争中の話だったかな、その中でサボタージュするとかね。それは怖いことですよ。見つかったら何をされるかわからない。それは一人ひとりの、そういう立場に置かれた人間の生き様の問題だと僕は思う。

[質問者7] お話を聞いていて、市民感覚というのが一つのキーワードかなと感じていましたので、市民感覚というのは一体どういうものなのかお聞きしたいのですが。これからどういう市民感覚を私たちは身に付けなきゃいけないか

とか、若者に伝えなきゃいけないのかということ、もし具体的な方法とかがあれば教えてください。

益川氏：いや、そんな方法があるわけじゃないよ。僕が言っている市民感覚というのは生活者としての目線。だから生活をしていくうえで必要なこと、やらなきゃいけないこと、なっほしい世界。僕はそういうものを念頭に置いています。

[質問者8] 今日の先生のお話で非常に期待というか希望を私は持ちました。教育の普及についてどう考えているかということなんです、日本は最近大学進学率が下がってきていますね。私はみんなが高等教育を受ける社会のほうが将来性があると思っています。授業料が高いので今は入学者も減っているんですね。そういう私学はととも増えています。これは私学助成ということと絡んできますが、思い切って経営者が授業料を下げたくさんの学生を受け入れて社会に貢献できる人材を作った方がいいんじゃないか。そのほうが私は人類社会にとっていいんだと思っているんですね。先生は高等教育の普及と人類の福祉の未来についてどういうふうにお考えか、何かヒントがあればお聞かせいただきたい。

益川氏：あの、僕はあんまり教育のことを語る資格がないんですけども。なぜかというと研究所生活が長くて学部学生も教えたことがない。京大で研究所の所長をやっているときに学部教育をやってみたからわざわざ総長にお願いして、教育していいよっていう許可を経て1年やりました。

僕が思っているのは、誰でも彼でも大学に来て勉強できることは、基本的にはいいことなん

だけでも、そう手放しでいいことでもないと思う。大学自身が学生が来て遊んでいるだけの場所になっちゃいけない。本当に目的を持って勉強したい、こういうことを習得してみたいという人に対しては、奨学金も豊かなものにしてやってもらう。大学に来ている人たちが本当に勉強したくて来ているんじゃなくて、就職するの

が嫌だから来ているという側面もあると思うんだよね。1回就職させて、それからちゃんと目的意識を持ってもう少しこういうところを補強してみたいという目的がある人が来て、十分安定した生活ができるようなシステムにすべきなんですよね。誰でも彼でも大学に来たらいいとは僕は思わないですね。

